

# 福祉系大学生のボランティア活動に関する動機と活動から得られるメリット及び満足度の関連性に関する調査

大学院 社会福祉学研究科 博士前期課程 2 年

渡久地 美智留  
星 海 月  
保 坂 沙 弥  
井 上 剛  
加 賀 滉 樹

## I. はじめに

### 1. 背景

1995 年の阪神・淡路大震災におけるボランティア活動を契機として、ボランティア活動に対する関心はいっそうの高まりをみせた（石本, 2004）。

ボランティア活動を通して得られることについて、「多くの仲間ができた」という人間関係の形成への評価や多様な副次的メリットを得られること、「視野が広がる」など自己成長の機会となっていることが明らかになっている（全国社会福祉協議会, 2010）（荒木ら, 2012）。

また、地域住民のボランティアに関する研究（坂野・矢嶋ほか, 2012）においては、ボランティア参加動機が活動の利益を経由して、間接的に満足度に影響を与えることが明らかになっており、ボランティア活動希望者の動機を把握し、希望する利益に適した活動の場を提供することで、活動希望者およびボランティア活動を受領する者双方にとって有益な効果がもたらされとの示唆がなされている。

一方、大学生に限った先行研究については福祉のボランティア活動に関する実態調査があったものの、その動機や、満足度等の相互の関連性を検討する研究は見当たらなかった。

### 2. 研究の目的

本研究は、福祉系大学の学生に対して、「ボランティア活動に関する動機と活動から得られるメリット及び満足度の関連性」について、アンケート調査を実施し、「大学生にとってのボランティ

ア活動の動機を把握するとともに、メリットや満足度との関連性を明らかにし、必要なサポートについて考察・提言することで、ボランティア活動の促進を図ることを目的とする。

（本研究は本大学大学院社会福祉学研究科における「社会福祉調査研究法基礎論」の講義の趣旨に沿って行ったものである。）

## II. 研究の方法

### 1. 調査対象・期間・方法・内容

福祉系大学の学部生 1～4 年生のうち、全授業から抽出した必修授業（3 教科）を受講する学部生を対象に無記名自記式のオンライン調査を実施した。調査期間は、2023 年 9 月～10 月とした。

なお、調査対象者の母集団は、必修科目の授業で調査実施日（依頼日）に出席している全学生とした。

アンケートの質問項目は、回答者全員を対象とする「I. 基本属性について（学年、ボランティア経験、）」と、「ボランティア経験」の有無によって設問が分かれる。「ボランティア経験あり」と回答した者に対しては、「I 基本属性について」の続きとして、「活動期間・活動領域・活動内容・ボランティア活動の紹介経路」を尋ねたうえ、「II. ボランティア活動の参加動機について（1）～（14）」、「III. ボランティア活動で得られるメリットについて（1）～（13）」、「IV. ボランティア活動の満足度について【活動前】（1）～（3）、【活動後】（1）～（4）」、「V. 支援体制について」の質問項目を設けた。なお、II、III、IVに

については、「1 あてはまる」から「4 あてはまらない」までの4件法での回答選択肢とした。

一方、「I. 基本属性について」で「ボランティア経験なし」と回答した者に対しては、「ボランティア活動をするのに必要な条件」を問う設問のみとした。

## 2. 倫理的配慮

アンケート実施時は、調査協力者に不利益が生じないように、匿名化することや自由記述における固有名詞はアルファベット等で記号化すること、調査への協力は任意であり、協力せずとも不利益を被ることはないこと、回答しづらい質問項目があれば回答しなくてもよいことなどを、書面と口頭で説明した。

また、オンラインアンケートのデータ送信によって、本研究への協力について同意されたこととみなし、その後は匿名であるため回答は撤回できないこと、途中で協力を中止したい場合には、データを送信せず、中断して差し支えないことなども併せて書面と口頭で説明し、同意を得られたもののみを対象とした。

なお、本研究は日本社会事業大学研究倫理委員会による倫理審査を受けて実施した（承認番号23-0404）。

## 3. 分析方法

本研究は、概念モデルを作成して実施した図1)。先行研究では、①「活動動機」と「メリット」、そして②「メリット」と「満足度」の関連があることが示されており、③「活動動機」と「満足度」については、関連がみられなかったとされている。また、本研究では、先行研究では調査がされていなかった、④「活動動機」と「活動内容」及び「活動領域（児童、高齢等の分野）」、⑤「活動内容」及び「活動領域」と「満足度」、⑥「活動内容」及び「活動領域」と「メリット」についても関連性をみることにした。

あわせて、自由記述についても分析を行い、ボランティア活動に対するサポートとして、必要

な支援についても考察を行った。以下に分析の手順を示す。

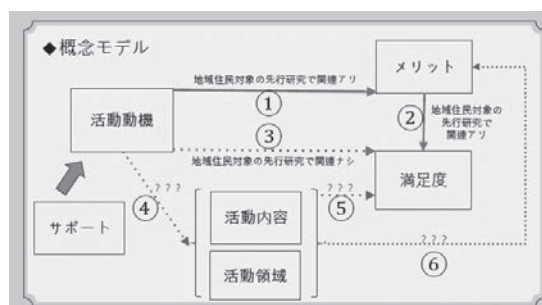
### 1) 全体の傾向、ボランティア活動動機・メリット・満足度について

回収したデータに関しては、①基本属性をはじめ、全体の統計量を確認するとともに、②設問2「ボランティア活動の参加動機」、設問3「ボランティア活動で得られているメリット」について、探索的因子分析（主因子法）を行った。③因子分析で抽出された構成要素と設問4「ボランティア活動の満足度」や基本属性に関する各設問との関連について相関分析を行った。なお分析には、IBM SPSS Statistics24を使用した。

### 2) ボランティア活動を行うために必要な条件・支援について

「活動を進めるうえで必要と思われるサポート（自由記述）」については、テキストマイニングを用いて形態素解析を行った上で、SPSSを用いて因子分析を行った。

図1) 本研究の概念モデル



## Ⅲ. 結果

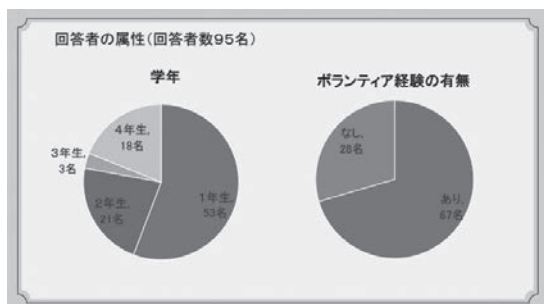
### 1. 全体の傾向、ボランティア活動動機・メリット・満足度について

#### 1) 回答者の属性について

回答数は95票（有効回答数も同様）であった。そのうち、1年生53票（55.8%）、2年生21票（22.1%）、3年生3票（3.2%）、4年生18票（18.9%）である。

ボランティア経験の有無については、経験あり67票（70.5%）、経験なし28票（29.5%）であった図2）。

図2) 回答者の属性



## 2) 因子分析・主成分分析の結果について

回収したデータのうち、「活動動機」及び「メリット」について、探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。固有値 1.0 以上のルールとスクリープロットを用い、「因子負荷量が 2 因子にまたがり 0.40 以上の項目」、「どの因子にも 0.40 未満の因子負荷量の項目」を除いて繰り返し分析を行った。

その結果、「活動動機」については、5 回目で 3 因子が抽出され、「メリット」については、9 回目で 4 因子が抽出された。

各因子に帰属する質問項目とその因子負荷量をもとに、それぞれの因子に名称をつけた。「活動動機」の第 1 因子は「日常生活の充実」、第 2 因子は「自己成長」、第 3 因子は「進路選択」と名付けた図 3)。また、「メリット」の第 1 因子は「自身の成長」、第 2 因子は「キャリアへの貢献」、第 3 因子は「人との関わり」、第 4 因子は「やりがいいある一日」とした図 4)。

さらに、「活動内容」については、8 つの項目の情報を集約することを目的に、主成分分析を

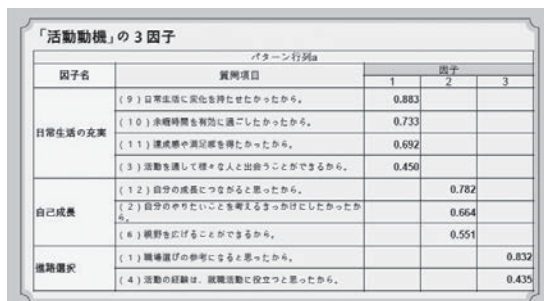
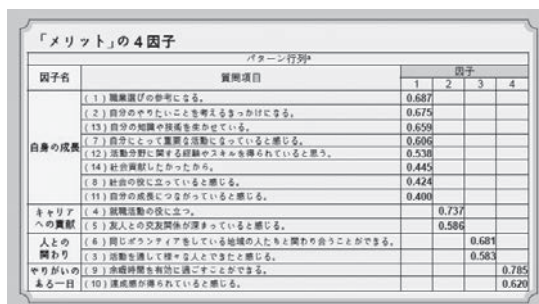


図4) 「メリット」の因子



行った。その結果、2 つの成分ができ、成分に帰属する選択肢項目と負荷量をもとに、それぞれ「関わり・体験」と「保育・教育」と名付けた図 5)。

図5) 「活動内容」の成分



## 2. 尺度間の関係について

抽出した「参加動機」と「メリット」の各因子と、「活動満足度」の相関を見た結果、相互に影響していることがみられた図 6,7,8)。また、「活動内容」の 2 つの成分と「メリット」の因子及び「活動満足度」の相関や、「活動領域（高齢、障害等）」と「メリット」の因子及び「活動満足度」の相関については、関連性に有意はでなかった。

図6) 「活動動機」と「メリット」の相関

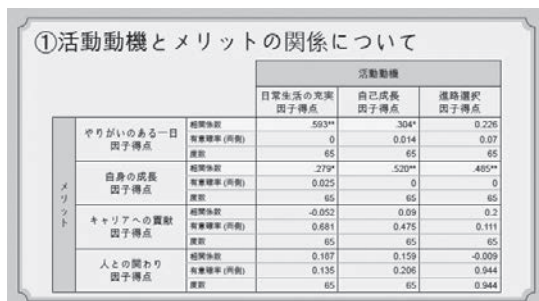


図7)「メリット」と「活動満足度」の相関

②メリットと活動満足度の関係について

		活動満足度				
		(1)生活がすぐくまないと感じる。(事後)	(2)自分の好きなことがやれていると考える。(事後)	(3)友達関係も感じる。(事後)	(4)ボランティア活動経験によって生活が豊かになったと考える。(事後)	
メリット	自身の成長 因子得点	相関係数	0.151	0.277*	0.243	0.411**
		有意水準(両側) 度数	0.231 65	0.026 63	0.051 65	0.001 65
	キョリアへの賛助 因子得点	相関係数	0.056	0.133	0.173	0.116
		有意水準(両側) 度数	0.656 65	0.298 63	0.169 65	0.358 65
	人とのかかわり 因子得点	相関係数	0.121	0.193	0.136	0.102
		有意水準(両側) 度数	0.336 65	0.131 63	0.281 65	0.419 65
	やりがいのある 因子得点	相関係数	0.094	0.196	0.242	0.477**
		有意水準(両側) 度数	0.457 65	0.123 63	0.052 65	0 65

図8)「活動動機」と「活動満足度」の相関

### ③活動動機と活動満足度の関係について

		活動動機			
		日常生活の充実 因子得点	自己成長 因子得点	友達関係 因子得点	
活 動 満 足 度	(1)生活がすぐくまないと感じる。(事後)	相関係数	0.108	0.279*	0.175
		有意水準(両側)	0.306	0.022	0.157
	(2)自分の好きなことがやれていると 感じる。(事後)	相関係数	0.164	0.339**	0.1
		有意水準(両側)	0.142	0.006	0.426
	(3)友達関係を感ずる。(事後)	相関係数	0.217	0.356**	0.130
		有意水準(両側)	0.077	0.003	0.266
	(4)ボランティア経験は私にとって非常に有意義 である。	相関係数	0.195	0.397**	0.118
		有意水準(両側)	0.113	0.001	0.34
	度	相関係数	0.108	0.279*	0.175
	度	有意水準(両側)	0.306	0.022	0.157

### 3. ボランティア活動を行うために必要な条件・支援について

#### 1) ボランティア活動を行うために必要な条件と有効な情報提供

ボランティア経験「なし」と回答した者に対し、「ボランティア活動するにはどのような条件が必要ですか」と問う設問への回答では、主に①時間の余裕がある(32件、82.1%)、②は始めるきっかけがある(21件、75%)、③ボランティアに関する情報がある(17件、60.7%)が挙げられていた。

ボランティア経験が「ある」と回答したものに対する設問で、「大学による有効だと思われる情報提供の方法は何ですか」という問いに対しては、①メール配信(52件、77.6%)、②教員からの声かけ(50件、74.6%)、③ボランティアセンター(24件、35.8%)が挙げられていた。

#### 2) ボランティア活動を進めるうえで必要と思われるサポート

「活動を進めるうえで必要と思われるサポート

(自由記述)」については、テキストマイニングを用いて形態素解析を行った上で、SPSSを用いて因子分析を行い、必要なサポートの構成要素を明らかにした。固有値1.0以上のルールとスクリープロットを用い、「因子負荷量が2因子にまたがり0.40以上の項目」、「どの因子にも0.40未満の因子負荷量の項目」を除いて繰り返し分析を行った。

その結果、5回目で4因子が抽出された。各因子に帰属する質問項目とその因子負荷量をもとに、それぞれの因子に名称をつけた。第1因子は“活動しやすい環境の提供(始めるきっかけと継続できる環境)”，第2因子は“活動に必要な知識の提供”，第3因子は“活動費用の補助”と名付け、第4因子は“情報体制の整備”とした図9)。

図9) 活動を進めるうえで必要と思われるサポート

ボランティア活動を進めるうえで必要なサポート

名称	項目	1	2	3	4
活動しやすい環境の提供	活動できる	0.879			-0.114
	環境	0.875	-0.112		0.354
	始める	0.801	-0.135	0.115	
	先駆	0.703	-0.128	-0.13	
	聞く	0.685	-0.182	-0.145	-0.154
活動に必要な知識の提供	経験		0.943		
	知る		0.863		
	ボランティア活動	-0.168	0.586		
活動費用の補助	ボランティア保険	-0.217	0.514	-0.242	0.107
	交通費		-0.126	0.854	
	参加	0.113	0.133	0.82	
情報体制の整備	補助	-0.143		0.76	
	情報				0.81
	体制				0.772
	作る				0.772

## IV. 考察

### 1. 全体の傾向、ボランティア活動動機・メリット・満足度について

#### 1) 回答者の属性について

荒木ら(2012)の福祉学科生の福祉ボランティアに関する調査と比較すると、学年別のボランティア活動の有無では荒木ら(2012)では、学年が上がるごとにボランティア活動への取り組みが活発化しているが、本研究においては2年生より1年生の方がボランティア活動に活発的に取り組んでいた。4年生では荒木ら(2012)の研究と同様、ボランティア活動の取り組みがほかの学年に比べ、活発的である。その理由として、①COVID-19による活動制限の解除が行われた



こと、②2年生は講義や実習等でボランティア活動に取り組む時間が非常に限られていることが推測される。しかし、本研究では荒木ら（2012）の調査対象よりも非常に少ないデータのため、今後データ数を増やしての調査で確認する必要がある。

ボランティア活動経験の有無と比較すると、内閣府（2023）の実態調査では「したことがある」が17.0%、「したことがない」が83.0%であるが、本研究では「経験あり」70.5%、「経験なし」29.5%と逆転した結果になった。本研究では福祉の学生に調査を行ったため、ボランティア活動に意欲的な学生が多いことが要因として考えられる。

## 2) 活動動機やメリット、活動満足度等の関係について

坂野ら（2004）の研究においては、ボランティア参加動機は、ボランティア利益を経由して、ボランティア満足度にも間接的に影響することが示されており、活動動機が満足度に直接的な影響はみられなかったとされるが、本調査結果では、参加動機、メリット及び活動満足度は、相互に影響していることがみられた。

また、活動内容（関わり・体験、保育・教育）とメリット及び活動満足度や、活動領域（高齢、障害等）とメリット及び満足度については、関連性に有意ではなかった。

この結果から、ボランティア活動の分野や内容の明示だけでなく、ボランティア活動を通して得られるメリットや満足度を示すこと、活動に興味がある学生の動機を把握すること、希望するボランティア活動とを結び付けるボランティアコーディネート的重要性が窺える。

さらに、これまでの荒木ら（2012）、坂野ら（2004）によれば、ボランティア活動によって得られるメリットは満足度を高めることや、ボランティア活動の継続にも影響を及ぼすことが報告されているが、本調査結果においても、活動期間と活動満足度は関連がみられ、「活動期間が長くな

れば長くなるほど、活動満足度が高くなる」または、「活動満足度が高まれば高くなるほど、活動期間が長くなる」ことが考えられる。

## 3) ボランティア活動を推進する方策について

ボランティア活動を行う際の課題として、時間的な制約が大きいことが挙げられる。荒木ら（2012）の実態調査においてもボランティア活動に参加しなかった理由に、アルバイトや授業で「時間がないこと」を挙げており、本調査においても①にある通り、活動開始の条件に「時間の余裕がある」が最多であり、同様の結果となっている。

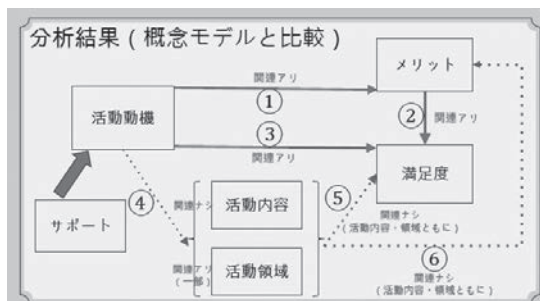
ボランティア活動には、短時間のものや長期的なものなど様々な形態がある。単に情報提供の手段を増やすだけではなく、活動に関するタイムスケジュールを明記したり、拘束時間が少ないものから積極的に周知する等、学生のニーズに合う形で、情報が発信されることも役立つのではないかと思われる。

## V. まとめ（結論と本研究の限界）

本研究の概念モデルに添った結果を示す図10)。本研究では、動機とメリット、活動満足度の関連性を分析し、互いに影響を与えていることが窺えた。

また、必要なサポートとして、①活動しやすい環境の提供、②活動に必要な知識の提供、③活動費用の補助、④情報体制の整備が考えられ、有効な情報提供の手段については、①メール配信、②教員からの声かけ、③ボランティアセンターが挙げられていた。

図10) 分析結果（概念モデルとの比較）



以上を踏まえ、情報発信の際には、ボランティア活動の分野や内容の明示だけでなく、ボランティア活動を通して得られるメリットや満足度を示すことや、ボランティア活動に興味がある学生の動機を把握し、希望するボランティア活動とを結び付けるボランティアコーディネートの重要性について示唆された。さらに、活動継続や活動の満足度を高めるために、前述のサポート体制を整え、ボランティア活動を通して得られるメリットや満足感をより多くの学生に情報を発信することで、ボランティア活動への参加を促進することに繋がるものとする。

くわえて、今回の研究結果の一つとして、「時間的な制約」が、ボランティア活動を行う際の課

題の一つとして窺えた。ボランティア活動に関するタイムスケジュールを明記したり、拘束時間が少ないものから積極的に周知する等、学生のニーズに合う形で、情報が発信されることも役立つのではないかと考える。

なお、本研究の限界として、学年に偏りがあったことや、福祉系大学の学生を対象に調査を行ったため、他領域の大学生との比較を行うことができなかったことが挙げられる。そのため、母数を増やし対象を拡大することで、多くの学生のボランティアの実態や活動促進のための研究につながると考える。また、最後に、尺度の信頼性・妥当性についても検討がなされる必要があったという残された課題についても触れておきたい。

#### <引用文献>

---

- 1) 石本雄真 (2004) 「『大学生のボランティア活動の動機』(日本青年心理学会第12回大会)」『日本青年心理学会大会発表論文集』12, 40-43
- 2) 全国社会福祉協議会 (2010) 「全国ボランティア活動実態調査報告書」
- 3) 荒木剛, 山本佳代子, 遠山久仁子 (2012) 「福祉学科学生の福祉ボランティア活動に関する実態調査」『西南女学院大学紀要』16, 69-76
- 4) 坂野純子, 矢嶋裕樹, 中嶋和夫 (2004) 「地域住民におけるボランティア活動への参加動機と満足度の関連性」『東京保健科学学会誌』7 (1)
- 5) 内閣府 (2023) 「市民の社会貢献に関する実態調査報告書」